

文学作品とは、自在に操ることができる母国語による卓越した言語表現が作り上げる一つの世界である、というのが一般的な認識ではないでしょうか。それに真っ向から異を唱えるつもりはないのですが、創作における作家たちの苦労は、生半可なものではないはずで、自分とほぼ一体化してしまった言語を使って新しいものを生み出していくには、なじみ深い言葉たちがそれゆえにむしろ足かせになってしまうこともあるでしょう。あるいは、母国語ではない言語において執筆を行う文学者たちもいます。こうした作家と言語の格闘の記録、あるいは、作家本人やそれを取り巻く文化・社会・歴史と、一つの文学作品として姿を現すテキストの間に漂う何か、それが形式にも意味にも完全には還元されえない、文学の情緒的屬性としての文体なのではないかと考えています。

たとえば、アフリカ系アメリカ人作家の James Baldwin (1924-87) は、1964年に発表したエッセイ、“This Nettle, Danger...” において、次のように書いています――

外国語を習得する必要にかられたことで、母国語と新しい関係を築くことになった。〔中略〕英語と仲良くできなかったのは、その言語が私の経験をいくばくも反映していなかったからだ。しかし、いまやこの問題を全く異なったかたちで見ようになった。もしその言語が私自身のものではなかったとして、それはその言語の責任であるのかもしれないが、しかしまた、私自身のせいでもあるのかもしれない。ひょっとしたら、その言語が私自身のものにならなかったのは、私がそれを使おうと試みたことがなく、たんにそれをまねようとしていただけだったからなのかもしれない。もしこれが正しかったとして、言語と私自身にそうさせるだけの根気をもつことができたならば、私自身の経験という重荷をそれに背負わせることができるかもしれない。(拙訳)

強制的にアフリカから新大陸に連れてこられた先祖たちが奴隷とされたアメリカの歴史に連なる、人種差別と人種隔離の社会を生きてきたアフリカ系アメリカ人にとって、英語は強要された言語でしかありえません。しかし、20代半ばでフランスに渡り、彼の地で10年ほど文学修行を積んだボールドウィンは、自分と英語の関係を見直したのだといいます。外国語を学ぶことで、お仕着せに過ぎなかった英語に自分のほうから歩み寄る――というか、つかみかかっていく――必要を感じるようになったというのです。

いったん距離を置いたからこそ見出される母国語との新たな関係。アフリカ系アメリカ人としての立場もあり、ボールドウィンと英語の関係は複雑です。だからこそ、その言語と向き合うことで、ボールドウィンは読者の心に響く、力強い、彼独自の「文体／スタイル」を磨いていきました。

作家と、文化・社会・歴史との間に生じる摩擦や葛藤がテキストに残した痕跡に着目して、それがこそ文体として表れていると考えながら、Ernest Hemingway (1899-1961)、Ralph Ellison (1914-94)、ボールドウィンといった作家たちを研究してきました。その一端を、紹介いたします。

#### 展示書籍・論文：

- ① 「ヘミングウェイのヴァナキュラー・スタイル――『誰がために鐘は鳴る』、人種、WPA」『ヘミングウェイ研究』（日本ヘミングウェイ協会）第18号（2017年6月）：43-52頁  
 <要旨>  
 スペイン内戦を舞台にしたヘミングウェイの長編小説『誰がために鐘は鳴る』（1940年）を、執筆当時のアメリカ国内における記録収集事業と重ね合わせて読み解いた論文です。これまでも、『誰がために鐘は鳴る』中のスペイン人ゲリラ達の「語り」が本小説の魅力の一つを成すことが指摘されてきました。英語で書かれた本小説は、そうしたスペイン人たちの独特の語り口を、それとわかるように工夫して現しています。そのような言語上の工夫（「ヴァナキュラー・スタイル」の使用）と、国家における文化の所在を民衆に定める想像力の双方が、1930年代のニューディール政策下の文化事業を反映している可能性を論じました。
- ② 「老兵死す――ヘミングウェイの『河を渡って木立の中へ』と冷戦」『揺れ動く<保守>――現代アメリカ文学と社会』山口和彦、中谷崇編、春風社、2018年9月、99-125頁  
 <要旨>  
 ヘミングウェイの長編小説『河を渡って木立の中へ』（1950年）を、冷戦という背景から再読した論文です。従来、同小説の主人公リチャード・キャントウェルはヘミングウェイの分身として解釈され、彼の使う言葉や態度は、尊大になってしまったヘミングウェイのそれを想起させるものとして批判されてきました。本論文では、キャントウェルの立ち居振る舞いを、第二次世界大戦後のアメリカ帝国を表象するものにとらえ直し、リチャード・ホフスタッターが論じた「パラノイド・スタイル」の一例として解釈し直しました。
- ③ 「Ralph Ellison の Hemingway 論とスタイル論――人種越境的な1930年代文化をめぐる」『関東英文学研究』（日本英文学会関東支部）第13号（2021年1月）：9-17頁  
 <要旨>  
 ①に連なる論文です。アフリカ系アメリカ人作家ラルフ・エリソンは、優れたアメリカ文化論、文学論を残しています。特に彼のスタイル論は特徴的で、スタイルを芸術家個人と文化伝統の関係としてとらえています。アメリカの文脈に即していえば、そうしたスタイルは、人種間の境界や、高級芸術／大衆文化といった区別を攪乱しながら巨大な推進力を生みだしていく、アメリカ文化の歴史そのものに重ねられます。この独自のスタイル理解は、エリソンによるヘミングウェイ論と密接に結びつきながら展開されていたことを論じました。さらに、エリソンが後年言語化していく「スタイル」が、1930年代のアメリカ文化の特徴として見出されることを指摘し、ニューディール政策のプロジェクトに参加していた若き日のエリソン自身、人種においても芸術の階層秩序においても折衷的な文化を体験していたこと、そして当時のエリソンが愛読していたヘミングウェイ作品もまた、そうした折衷的な文化の一つの例とみなされうることを論じました。